

山本泰次郎先生のこと（２）

昨年２月、キリスト教図書出版社の主催で開かれた「山本泰次郎聖書講義双書」出版記念感謝祭の席上、あいさつに立った山本先生は、人はみなそれぞれに特長を持っているが、自分の特長はものごとをまとめることにあるようだと言われて、双書と「内村全集」の編集について次のように言っておられる。（「キリスト教図書」１７号）

ある人が私の双書を見まして、山本は雑誌を始めた時から全集を作ることを念頭に置いてすべてを書いてきたんだ、だからこのような全集としてまとまっているんだ、というふうなことを言われました。けれどもそれは大変な誤解でありまして、私は雑誌を出してまいりまして、これが将来全集にまとまる時に、こういうふうにしておいたら都合がいいと考えて書いたことは一度もございません。あれはどうも私の性質らしいのであります。ものを書きます時に、首尾一貫して筋道を立ててやっていかないと、どうも気がすまないようであります。……

これは教文館の「内村全集」を編集した時も同じことでありまして、あの解説が、ごらんくださいますとご諒解願えると思いますが、私なりに首尾一貫しております。あれは最初から50巻になる積りで編集したわけではありませんで、最初は14、5巻で終わる筈でスタートしたのであります。あとからつぎ足しつぎ足ししていったのであります。しかしあとになって見ますと、殆どビルディングを建てるように順序立って進んできていることになっております。

どうも私には一つの仕事をそういうふうに進めざるを得ないような性格があるように思われます。……

ご自身の雑誌や双書、あるいは内村全集編集の仕事ばかりでなく、山本先生の生涯そのものが実に首尾一貫していた。

3月26日の早朝6時過ぎ、私共は先生のご長男実さんからの電話で先生の永眠を知らされた。直ぐにお宅に参上してご遺体にお目にかかり、奥様と実さんから先生の遺言を伝えられて、葬儀のご相談に与かったのであった。拝見した先生の「遺言」には、ご家族に対する心得、財産の処分、葬儀の仕方、その他が克明に記され、さらにご自分の死亡通知、「聖書講義」廃刊通知も同封されていた。葬儀については、福田秀雄君と私にまかすようにとあり、近親のみにて簡素に行うように、聖書はローマ書7・14～25、ガラテヤ書2・19～21、讚美歌は273番、515番と指定があった。葬儀は翌27日午後1時から自宅で、先生のご遺志に従って行われ、死亡通知はハガキで、廃刊通知は4月号誌上に、それぞれ先生が前もって書かれたものをそのまま用いて、なされたのである。

「聖書講義」誌については、直ちに廃刊するようにとある指示に従って4月号、405号をもって廃刊されたが、この4月号の原稿は、亡くなられた前の日、3月25日から月末までの日誌分を除いて全部出来上がっていて、既に筆耕の福田君に回っていた。そうしてあとになって考えてみると、私が告別式の式辞に引用した「平安の道」といい、「死の準備」といい、最近の「聖書講義」の巻頭言はすべて先生のご遺言と言ってよい文章ばかりである。ご家族のお話によるよ、先生は倒れてから亡くなられるまで、迷惑をかけてすまないという意味のことは言われたが、遺言めいたことは一と言も言われなかったそうである。先生は言うべきこと、言い残すべきことはすべて言いつくして逝かれたのである。

もちろん「聖書講義」誌に連載中の「ヤコブ書」や「マルコ伝」の講義は未完であった。私共の多くが希望的に思いこんでいた、まだ4、5年はお元気で福音を説きつづけて下さるであろうという願いが聞き届けられていたら、先生はさらに多くの聖書講義を残されたであろう。そして、これは先生は一度出版を断念したままで逝かれてしまったが、昨秋には先生が年来計画しておられた「斎藤宗次郎への手紙による内村鑑三

伝」も脱稿された。これは既刊の「ベル書簡」および「宮部書簡」による内村伝（東海大学出版会「内村鑑三」に所収）とあわせて、内村じしんの手紙による内村伝の3部作になるもので、先生が長年あたためておられた著作である。これはご家族のご好意とご決断で、ぜひとも出版していただきたいと願うが、とに角先生はこれを書きあげられて、まずお考えのうちにあったものはほとんど成し遂げられたものと思われる。先生は福音と聖書と内村先生とに関しては、すべてを語りつくして、召されたと考えてよいだろう。

それにつけても「聖書講義双書」が完成して本当によかった。その後の2年程の分は、キリスト教図書出版社オカノさんの好意により、双書の追加巻として刊行すべく準備中だが、これで先生の著作の主なもの全部本として残ることになる。先生が言うべきこと語るべきことは、すべて言い、すべて語って下さったのであれば、私共はこれから一層の敬愛をもって先生の著述を勉強したいと思う。そして先生の双書が、この時代の日本のキリスト教の確かな証言の一つとして、長く読みつがれていくことを信じるものである。

山本先生はその最後を実にしっかりと、美しくまとめられた。首尾を一貫された。先生のキリスト教は内村に始まり内村に終わった。そのキリスト教は、イエス・キリストの十字架による罪のゆるしの福音に始まり、苦難による潔めの歓喜に終わった。カオスからコスモスへの創造の信仰であった。その伝道は「聖書を国民の書に、国民を聖書の民に」の理想に始まり、その理想に生涯を捧げつくして終わった。

先生の首尾一貫性はもちろん先生のご性格でもあろう。しかし何よりも先生の首尾一貫したキリストへの忠誠と献身、首尾一貫した禁欲的信仰生涯そのものであり、その一途な信仰に対して父なる神がお与えになった恵みとしての首尾一貫性なのである。神がその首尾を一貫し、主が美しくまとめられた山本先生のご生涯は、まことに祝福された生涯であった。

(所載) 「テコア通信」第99号

1979年6月